

「同じ品質なら海外を使いますよ」

これは、この春、とあるところで聞いた国内メーカー経営者の言葉である。

危機感を煽るような励ましの言葉にも聞こえるが、わたしは、「もう、国内は使えない」と引導を渡されたように思った。

そして、率直に言うと、誰に向けるとも無い怒りを覚えた。国内の組込み産業を維持・向上（収益はもちろんであるが、人財育成、技術レベルの維持・向上）するには、一定量の仕事が無ければならないと考えるためである。しかし、仕事を海外に移管するのであれば国内組込み産業の向上どころか維持も覚束無い。これは、過去、糸偏産業（繊維産業）などで十分に経験し、痛い目（産業の衰退、国内産業の空洞化）にあってきたことではないか？同じ轍を踏もうというのか？

だが同時に、親とも言える経営者に、そのように思わせている現状に戦慄し焦燥感を覚えた。マーケットを世界規模で捉えるなら、日本国内の瑣末なことに心を割いていられないことは分からなくもない。一方、リーマンショック以降、いや、それより随分前から日本の産業の品質劣化に警鐘が鳴らされている。品質は全てを包含する故、品質の劣化は技術の劣化と言って差し支えないだろう。原因は様々に考えられるが、人に起因する問題は避けて通れないであろう。そう、技術が人であるのなら、技術者は自ら撒いた種で、自らの首を絞めている。

しかし、本当にそうであろうか？

リーマンショックは、かつて無い規模で経済にダメージを与え、その傷は未だ癒えていない。そのダメージは、研究や技術開発にも大きな影響を与えている。

だからと言って、これまで築き上げてきた日本の知識・智慧・技術が無くなることは無い。GDP は中国に追い上げられている<sup>1</sup>が、GDP 世界2位を下支えしている産業の力、そして、その産業そのものを下支えしている組込み産業の力は「伊達」ではない。そして、人口が高々1.1 億人程度の国であることを考えれば、その力は「凄い」といって差し支えない。

確かに、経済が安定せず仕事量・開発量が減っており、現場のエンジニアは不安感に苛まれているかもしれないが、こと技術に関すれば不安に思うことは無いのではないだろうか？そして、こんな状況だからこそ、腰を据えてやるべきことをやる時期ではないだろうか？

「海外を使う」というが、考えてみれば、活躍の場を国内に留める必要は無い。もともとワールドワイドに力を伸ばしてきたのである。これまでどおり、これからも、海外と互角、いやそれ以上に渡り合えばいい。第一、親に大事にしてもらえるなどと甘えてはいけけないのである。

根拠の無い「凄い」自信では心許無いが、地に足をつけ、根拠をもって「凄く」なろう。

そう、このポジションペーパー集には、そんな「凄い」話が数多く掲載されているのだから。

以上

---

<sup>1</sup> 8月に、2010年4-6月期の中国のGDPは日本を上回ったと報道された。